

第 27 回国際昆虫学会議 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会 議 名 : (和文) 第 27 回国際昆虫学会議
(英文) 27th International Congress of Entomology
(略称: ICE2024 KYOTO)
- (2) 報 告 者 : 第 27 回国際昆虫学会議組織委員会委員長 小野 正人
- (3) 主 催 : 日本昆虫科学連合、日本学術会議
- (4) 開 催 期 間 : 2024 年 8 月 25 日 (日) ~ 8 月 30 日 (金)
- (5) 開 催 場 所 : 国立京都国際会館 (京都府京都市)
- (6) 参 加 状 況 : 82 ヲ国・地域 4,278 人 (国外 2,957 人、国内 1,321 人)
※オンライン開催はなし

2 会議結果概要

(1) 会議の背景と日本開催の経緯

国際昆虫学会議 (International Congress of Entomology) は、昆虫学分野における世界最大の国際会議である。1910 年にベルギーのブリュッセルで第 1 回が開催されて以来、ほぼ 4 年ごとに世界各国で実施されている。1980 年には京都で第 16 回が開催され、今回が 2 度目の日本開催となった。44 年ぶりの日本開催となる第 27 回国際昆虫学会議 (ICE2024 KYOTO) では、日本昆虫科学連合と日本学術会議が共同主催し、環境保全や食料安全保障といった現代の重要な課題、その課題に対峙する異分野融合の重要性等に対する昆虫学の貢献が強調された。日本での開催は、国内外の研究者による交流の機会を提供し、日本が持つ昆虫学の研究・技術の水準の高さを国際社会に示す場ともなった。日本開催の経緯を以下に詳述する。

2016 年 6 月 12 日に国際昆虫学会議招致検討委員会が京都大学において開催された (委員長: 沼田英治、委員: 伊藤雅信、志賀向子、徳田誠、日本典秀、松浦健二、吉村真由美)。2024 年に開催予定の第 27 回国際昆虫学会議を日本に招致するかどうかについての議論を行った結果、日本の昆虫学者の国際貢献という見地から招致するべきとの結論に達した。また、開催時期は 2024 年 8 月下旬ごろ、日本政府観光局と相談しながら開催都市を検討することなどが決まった。

この決定を受けて ICE2024 招致委員会が発足し、2017 年 3 月 28 日に日本応用動物昆虫学会大会会場 (東京農工大学小金井キャンパス) において第 1 回 ICE2024 招致委員会が開かれた (委員長: 沼田英治、委員: 伊藤雅信、小野正人、沢辺京子、志賀向子、嶋田透、徳田誠、日本典秀、松浦健二、吉村真由美)。開催予定都市について千葉・横浜・京都・大阪・神戸の 5 都市について検討が行われ、京都と神戸に絞られた。2017 年 8 月 27 日に京都大学において第 2 回 ICE2024 招致委員会が開かれ、開催都市を京都にすることが決定した。また、大会役員を以下の通り決定した。

委員長 小野 正人 (玉川大学)
副委員長 志賀 向子 (大阪大学)
事務局長 松浦 健二 (京都大学)
会計責任者 日本 典秀 (当時: 農研機構、現在: 京都大学)
渉外委員長 嶋田 透 (当時: 東京大学、現在: 学習院大学)

日本昆虫科学連合は2017年11月21日開催の役員会において、ICE2024 招致委員会を連合内に設置することについて審議し、その設置の経緯から、その活動の目的に国外諸団体への対応等が含まれていること、また、日本の昆虫学界の総意として第27 回国際昆虫学会議の日本招致を行っていることを内外に示すためにも、昆虫科学を対象とする学術団体の連合体（17 の学協会が加盟）である本連合内に当該招致委員会を置くことが適切であるとの結論に達した。2018年2月4日に日本昆虫科学連合と ICE2024 招致委員会の間で「第27 回国際昆虫学会議招致委員会の設置に関わる覚書」が交わされ、2018年3月1日付けで「第27 回国際昆虫学会議招致委員会」が日本昆虫科学連合内に設置された。2018年3月9日に ICE2024 招致委員会委員長の沼田英治は日本政府観光局の MICE アンバサダーに就任し、日本政府観光局と協力しながら招致活動を進めた。2018年4月9日にロゴデザインの公募を開始し、2018年9月15日に日本昆虫科学連合において投票によりロゴデザインを決定した（図1）。本ロゴマークはアゲハチョウの翅をモチーフとしており、翅の間の隙間が五重塔を形作っている。また、翅の両側には向かい合う人々が描かれている。この青色は浮世絵でよく使用された「ジャパンプルー」と呼ばれる色である。白い線は経線と緯線を表しており、ロゴ全体が、世界中の昆虫学者が京都に集う様子を象徴している。



図1. 市民からの応募作品の中から選定された ICE2024 KYOTO の公式ロゴマーク

第27 回国際昆虫学会議招致委員会は招致のための検討を重ね、当時のコロナ禍においてもそれに対応した形でビッドペーパーとビッドプレゼンテーションの準備を進めた。2020年8月にヘルシンキで開催が予定されていた第26回国際昆虫学会議がコロナ禍のため延期された。2020年8月13日にオンライン開催された国際昆虫学会議評議員会において副委員長の志賀向子、事務局長の松浦健二によるビッドプレゼンテーションが行われ、2020年8月21日に2024年の第27 回国際昆虫学会議を京都で開催することが決定した。これを受けて、2020年12月19日に第27 回国際昆虫学会議招致委員会は役割を終え、これを引き継ぐ形で第27 回国際昆虫学会議組織委員会が発足した。コロナ禍の困難を乗り越え、オンライン会議や情報共有プラットフォームを活用し、また日本政府観光局や京都文化交流コンベンションビューローと連携して招致を成功に導き、鋭意準備を進めていることが高く評価され、日本政府観光局から2021年度国際会議誘致・開催貢献賞が授与された（図2）。



図 2. 日本政府観光局から 2021 年度国際会議誘致・開催貢献賞が授与

2021 年 1 月 13 日に PCO (Professional Congress Organizers) の選定のための組織委員会が開催され、候補者からのプレゼンテーションを受けて協議した結果、日本コンベンションサービス株式会社 (JCS) に決定した。コロナ禍により延期されていた第 26 回国際昆虫学会議が 2022 年 7 月 17 日～21 日に開催され、第 27 回国際昆虫学会議組織委員会は会期中にブースでプロモーション活動を積極的に行い、閉会式でプレゼンテーションを行った。日本学術会議の「代表派遣」制度により、嶋田常任委員と小野委員長（オンライン）の 2 人が同会議から派遣された。嶋田常任委員はシンポジウム開催などを通して会議の運営方法を調査するとともに、ブースでのプロモーション活動に参加して日本での ICE2024 開催に備えた。

2023 年 2 月 10 日に日本学術会議において、「令和 6 年度日本学術会議共同主催国際会議」への応募に係るヒアリング審査が行われ、2023 年 3 月 27 日の日本学術会議幹事会において共同主催国際会議の候補となった。その後、2024 年 1 月 12 日に閣議口頭了解がなされ、第 27 回国際昆虫学会議を日本昆虫科学連合と日本学術会議により共同主催することが正式に決定した。

今回の日本開催に際して、他国との招致競争を勝ち抜き、京都という歴史的な都市での開催が実現した。開会式では秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席のもと、厳粛な式典が執り行われた (図 3)。

(2) 会議開催の意義・成果

今回の ICE2024 KYOTO では、「New Discoveries through Consilience (知の統合による新たな発見)」をテーマに掲げ、昆虫学が他の学問分野と結びつき、複合的な課題解決を目指す意義が強調された。会議では、6 つの基調講演に加え、205 のセッションにおいて 2,817 件の発表が行われた。内訳として、口頭発表が 1,752 件、ポスター発表は 1,065 件にのぼり、参加者間で活発な討論が行われた。昆虫学の基礎研究から応用研究までが網羅され、幅広い分野での発展が確認された。こうした学術的発表と討論は、昆虫学が持つ社会的な意義を再認識させ、今後の学際的な連携の可能性を広げるものとなった。



図3. 秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席のもと厳粛な雰囲気で行われた開会式

開発途上国参加者及び若手研究者への援助策として、開発途上国からの参加費を学生料金と同額に設定すると共に、若手研究者および女性研究者の学術研究活動の奨励および国際的な活躍を支援することを目的とした発表論文賞を設けた。会議参加者の投票の結果、各々の演題数の約10%に相当する若手研究者口頭発表賞65件、若手研究者ポスター発表賞60件、女性研究者口頭発表賞58件、女性研究者ポスター発表賞34件の方が受賞した。

また、「Women in Entomology (WIE)」企画として、女性研究者の活躍に資する公開講演会を含めた様々なイベントが実施され、各国の状況や取組に関する情報が共有された。WIE ランcheon セミナーでは三條場千寿氏の司会の元、科学社会学がご専門の瀬戸口明久氏による Insect Collecting for Boys: Natural History and Gender in Japanese Popular Culture という講演が行われた(図4左)。日本の女性昆虫学者誕生の社会背景を歴史資料と共に紹介いただき、230名の聴衆が会場を埋め尽くした。また、イベント会場にはWIE 縁日ブースが設けられ、会議開催期間中多様なジェンダーや年齢の参加者が集い、男性・女性が同等に参画するアカデミアの在り方について個々の意見を活発に交換することができた(図4右)。これらのイベントは、昆虫学における女性研究者の活躍につながる更なる取組の必要性を認識する重要な機会となった。



図4. Women in Entomology ランcheon セミナー (左) と縁日ブース (右)

さらに、一般市民向けの公開講座や、小中高生によるポスター発表も実施され、日本の初等中等教育における昆虫学の役割の大きさを世界に伝える機会となった。これにより、次世代の昆虫学者を育成する上で貴重な経験が提供され、地域の学生や市民が昆虫学の魅力やその学術的・社会的価値

値について 理解を深める契機となった。

基調講演 (plenary lecture) は参加者全員が聴くため、その会議を特徴づけることになる。そこで、1) 講演内容と 2) 研究活動をしている地域、3) ジェンダーの 3 項目それぞれのバランスを考えて講演者を選考した。講演内容は昆虫と微生物の共生、昆虫系統・分類学、昆虫食、森林害虫の管理、衛生昆虫学、昆虫生理学というように偏りの無いようにした。次に、研究活動をしている地域は日本、東南アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、南米から各 1 名を選んだ。さらに、ジェンダーバランスを考えて女性 3 名、男性 3 名に講演を依頼した。研究業績が卓越しているだけではなく、今回の会議のテーマを考慮し、分野や研究領域の境界を越えて昆虫科学に貢献している研究者から基調講演者を選んだ。すべての基調講演はメインホールで行われた。講演者と国、演題、その座長は以下のとおりである。

8 月 26 日 08:15~09:15

Nancy A. Moran (アメリカ合衆国) The Tangled Bank of Insect-Microbe Symbiosis

座長：深津武馬

8 月 27 日 08:15~09:15

Fredrik Ronquist (スウェーデン王国) A New Era of Insect Diversity Research

座長：阿部芳久

8 月 28 日 08:15~09:15

Yupa Hanboonsong (タイ王国) Edible Insects: Promises and Challenges

座長：由良敬

8 月 29 日 08:15~09:15

Juan Corley (アルゼンチン共和国) Understanding the Population and Behavioral Ecology of an Invasive Forest Insect: Insights for Sustainable Pest Management

座長：吉村真由美

8 月 30 日 08:15~09:15

Rosemary Sang (ケニア共和国) Scaling Up Integrated Surveillance to Combat Arbovirus Transmission and Emergence, A Perspective from Kenya

座長：沢辺京子

8 月 30 日 16:30~17:30

神崎亮平 (日本) Learning from Insect Intelligence

- From a Nature-Centered Perspective -

座長：志賀向子

一般講演については、過去の会議のように大きなカテゴリーとして 20 個のセクションを決め、セクションごとにシンポジウムを公募した。その結果、表 1 の通り合計 176 個のシンポジウムテーマが採択された。次に、シンポジウムごとに一般口頭発表演題とポスター発表演題を募集した。その結果多くの応募があり、これらを 176 個のシンポジウムと 29 個のポスターセッション (合計 205 個のセッション) としてプログラムを編成した。なお、各シンポジウムはオーガナイザーからあらかじめ推薦された発表演題と一般口頭発表演題から構成された。シンポジウムは 19 会場に分かれて、ポスターは 1 ホールで実施された。これらシンポジウムの内容チェックや採択、プログラム構成にはセクションごとに設けたコンベナー (convenor) の協力を得た。コンベナーは、深い学識を有し、今回の会議のテーマに理解を示す国内外の研究者総勢 61 名 (国内 32 名、国外 29 名) に依頼した。

表1 セクション一覧

No.	セクション名	シンポジウム数
1	ダニ学、クモ学	4
2	養蜂学、養蚕学	5
3	生物的防除	11
4	化学生態学	5
5	保全、生物多様性、生物地理学	9
6	発生生物学、生殖生物学	4
7	生態学、進化学	18
8	遺伝学、ゲノム科学	7
9	免疫学、病理学	1
10	昆虫・微生物相互作用	9
11	食用昆虫、花粉媒介者	8
12	外来昆虫	5
13	衛生昆虫学、獣医昆虫学	10
14	害虫防除	23
15	殺虫剤、遺伝子組換え作物、抵抗性、毒物学	6
16	生理学、神経生物学、分子生物学	17
17	社会性昆虫	6
18	体系学、系統進化、形態学	13
19	バイオミメティクス（生物模倣）、ロボティクス	4
20	その他	11
	合計	176

(3) 主な議題（テーマとセクション）

ICE2024 KYOTO では、「New Discoveries through Consilience」を統一のテーマとして、20のセクションが設けられ、昆虫学に関わる多様な分野での発表と討論が行われた。主な項目としては、昆虫媒介性感染症、地球環境変動と生物多様性、農業分野での昆虫活用、バイオミメティクスといったものが挙げられる。また、機械学習と昆虫分類学、スワームロボティクスなど、昆虫学が他の分野と融合することで生まれる新たな技術が注目された（図5）。これらの議論は、昆虫学が人類の直面する複合的な課題にどのように貢献できるかを示すものであり、学術的な価値を超えた社会的意義を持つ内容となっていた。



図5. ICE2024 KYOTO のテーマとした New Discoveries through Consilience のイメージ

(4) 会議の主な成果と日本が果たした役割

ICE2024 KYOTO は、日本の昆虫学研究の水準を国際的に発信する場となり、特に若手研究者にとっては貴重な学術交流の場となった。国内外の研究者が一堂に会し、最新の研究成果を共有し、今後の研究の方向性についての討論が行われた。「Women in Entomology」企画は昆虫学における女性活躍推進のための国際的な情報共有の場として重要な役割を果たした。市民向けプログラムとして、公開講座やポスターセッションが開催され、一般市民にも昆虫学の魅力が広く伝えられた。市民公開講座では、地域の学生や市民が参加し、学問の入口として昆虫という生物がもつ魅力とその重要性、昆虫学の面白さや昆虫が持つ環境的・経済的価値についても理解が深まった。

閉会式における国際昆虫学会議評議員会の Walter Leal 会長による総評では、ICE2024 KYOTO が「人生で最高の国際昆虫学会議だった」と格別の評価をいただいた（図6）。また、大会終了後に Leal 会長が実施したアンケート調査の結果、全体で 93.1%の回答者が ICE2024 KYOTO について「非常に満足」または「満足」と回答しており、これは過去の大会と比較しても非常に高い評価であった。ICE2016（米国オーランド）での満足度が 88%であったことを考えると、今回の大会は参加者にとって印象深く、有意義なものとなったことが窺える。また、今回の参加者のうち、48.5%が初めて ICE に参加したことも注目すべき成果である。新しい参加者の獲得は、ICE の影響力がより広がっていることを示している。参加者からは、学術的な充実度や文化的要素、組織運営のスムーズさに対して高い評価が寄せられた。ポスターセッションの適切な間隔や、プレゼンテーションのアップロードの簡便さ、ボランティアの協力的な対応も好評であった。これらのフィードバックを踏まえ、ICE2024 KYOTO は、参加者から「優れた組織運営と学術交流の場」として高く評価された国際会議であったことが確認された。

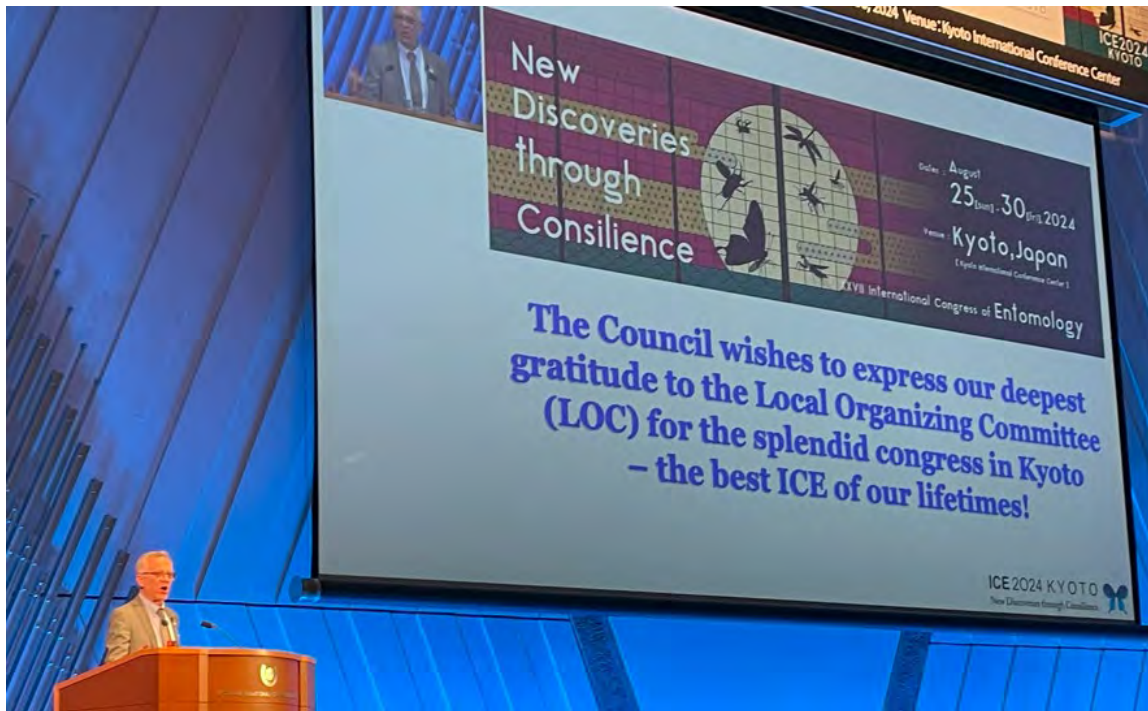


図6. 閉会式でICE2024 KYOTOを総括する国際昆虫学会議評議員会のWalter Leal会長

(5) 次回会議への動き

第27回国際昆虫学会議の会期中に次期第28回の開催国を決定する評議員会が行われ、ビットプレゼンテーションが実施された。その結果、2028年に南アフリカ共和国のケープタウンで開催されることが決定した。今回のICE2024 KYOTOの成果を踏まえ、次回会議では、昆

虫学が他分野と融合し、新たな知見を生み出すための学際的なアプローチがさらに期待される。ケープタウンでの会議では、特に気候変動や生物多様性保全、農業技術の発展が主要なテーマとして取り上げられる見込みである。次回会議への準備にあたって、今回の日本開催での成功が基盤となり、国際的な研究ネットワークの一層の拡大が期待されている。

(6) 会議開催中の模様

今回の ICE2024 KYOTO では、参加者同士のネットワーキングを支援するために独自に開発した交流促進アプリ「Consilience App」が導入された（図7）。このアプリは、セッション情報の管理や他の参加者との連絡を簡便に行えるだけでなく、研究発表のフィードバックやイベント参加の調整といった多機能を備えており、参加者に大変好評であった。Consilience App は、学術的な討論だけでなく、文化交流や市民プログラムなどの活動も支援し、会議全体を通じて参加者同士のつながりを強化する役割を果たした。このアプリを通じて新たな国際的な研究ネットワークが形成され、今後の学術的交流と連携の促進に寄与することが期待される。なお、当該アプリの開発が京都大学で昆虫生態学を専攻する大学院生によってなされたことは特筆に値する。

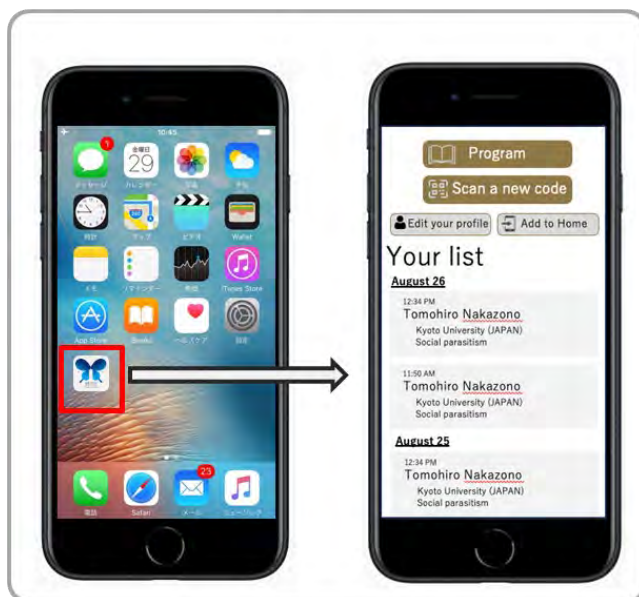


図7. 参加者同士のネットワーキングを支援するために開発された「Consilience App」

(7) その他特筆すべき事項

開会式では秋篠宮皇嗣殿下からおことばを賜った。来賓の内閣府特命担当大臣、京都府知事及び京都市長からは祝辞をそれぞれ頂戴し、また、内閣総理大臣のメッセージが披露された。

会議中に実施された文化交流イベントでは、参加者が日本の伝統文化や自然環境に触れる機会が提供され、日本文化と昆虫の多様で深い関わりを世界に発信する貴重な機会となった。昆虫学における女性の活躍を支援するために「Women in Entomology」企画が設けられ、女性研究者のためのセミナーや市民も参加できる公開講座が実施された。この企画を通じて、各国の状況や取組が共有され、女性の活躍推進に関する更なる取組の重要性が再認識された。さらに、学生や市民向けのプログラムを通じて、昆虫学の社会的価値が広く発信され、持続可能な発展に向けた日本の取組が国際的に評価された。

3 市民公開講座の概要

- (1) 開催日時：令和6年8月28日（水）
- (2) 開催場所：国立京都国際会館（京都府京都市）
- (3) 主なテーマ、サブテーマ：
 - 1) 市民向け講演会：16：00-17：30@メインホール
 - 2) 昆虫観察会：13：00-15：30@Room F
 - 3) 小中高生ポスター発表会：11：45-13：30@イベントホール
 - 4) Women in Entomology 講演会：14：00-15：30@メインホール
- (4) 参加者数、参加者の構成：
 - 1) 市民向け講演会：市民参加者 142 名（事前 101／当日 41）、会議参加者含む総参加者数 230 名
 - 2) 昆虫観察会：小中学生 23 名、引率者 24 名＝合計 47 名（その他、大会参加者の外国人研究員 9 名、日本人担当者 5 名、ファシリテーター 8 名）
 - 3) 小中高生ポスター発表会：発表件数 19 件、発表者 26 名（小 5 名、中 4 名、高 17 名）、引率者 26 名＝合計 52 名
 - 4) Women in Entomology 講演会：市民参加者 63 名（事前 40／当日 23）、会議参加者含む総参加者数 324 名
- (5) 開催の意義：
 - 1) 市民向け講演会
海外の研究者が自然（昆虫）に対してどのような視点で接しているか、日本の市民に紹介することが出来た。また、講演会を通して、昆虫学の魅力を感じてもらい、生物多様性保全の重要性などに関する理解を深めてもらうことができた。なお、英語による講演であるため、日英同時通訳を行った。
 - 2) 昆虫観察会
海外の昆虫学者との交流を通じて、子どもたちの自然科学への関心を高めることを目的に、小学生～中学生を対象として、20 組程度を目安に一般公募し、日本の子どもの参加者を募るとともに、海外研究者からも参加者を募った。子ども・海外研究者・日本の大学院生からなるグループを作り、会場の中をグループで行動しながら、顕微鏡を用いた昆虫の観察を行った。子どもたちが大学院生の補助を得ながら、昆虫について海外の研究者とディスカッションするという、海外の研究者との触れ合い体験の場を提供した。
 - 3) 小中高生ポスター発表会
国内外の昆虫学者によるポスター発表の時間に、同じ会場で、小中高校生が発表できる機会を設けた。小中高校生のクラブ活動やこれまでに行った研究の成果を、ポスターやブースでの実演で英語で海外の研究者に紹介し、未来の研究者が現在の研究者と交流を深める機会とした。小中高校生が海外の昆虫研究者と触れ合うことで、自然科学への興味を膨らますことができ、将来、科学者になりたいと願う子どもたちを増やすことが出来た。この経験が日本の科学技術向上への一助となることを期待する。
 - 4) Women in Entomology 講演会
ユネスコ統計研究所のデータによると、世界の研究者に占める女性の割合は 30%に満たない。とりわけ日本を含む東アジアの女性研究者の割合は、世界的に見ても著しく低い。本講演会では、まず Charlotte Payne、Gabriela Caballero、原田慶恵の 3 氏が、女性研究者の立場についての世界の若手研究者の視点と日本におけるジェンダーアンバランス改善についての取組を紹介した。後半では、3 講演者とファシリテーターによるパネルディスカッションを通して、国、地域、世代間での本課題についての意見交換を行った（図 8）。講演会には日

英の同時通訳を提供した。講演会後はイベント会場の WIE 緑日ブースに場所を移し、さらに活発な議論が続いた。本企画は、よりバランスの取れた包括的なアカデミアの発展を促すことの重要性を市民の皆様と一緒に考える機会を提供することによって、我が国の男女共同参画の理解と推進の一助となったものと考えている。



図8. Women in Entomology 講演会—演者とファシリテーターによるパネルディスカッション

(6) 社会に対する還元効果とその成果：

1) 市民向け講演会

「暴れる侵略者、立ち向かう昆虫学者—無視できなくなった虫たちの脅威に私たちはどう向き合うか」というテーマで3名の方に講演を行っていただいた(図9)。外来種が生態系に及ぼす影響は世界中で問題になっているという観点から、侵入昆虫の問題を解決するために市民と共に研究に取り組んでいる昆虫学者に話題提供をしてもらった。Helen E. Roy氏は「市民の力で外来テントウムシの生態を解き明かす」と題し、害虫を食べてくれる外来テントウムシによる在来昆虫多様性への影響に対する解決策の一つとして、イギリスでの市民参加による方法を紹介した。Man-Miao Yang氏は「虫こぶ形成昆虫：自然界の建築家、そして侵入者」と題し、虫こぶ形成昆虫の驚くべき適応能力や生態学的意義、植物との相互作用について話題提供した。Evan P. Economo氏は「世界を征服したアリたち」と題し、アリの存在意義や、侵略的で在来の生物多様性や農業への脅威となるアリ類について話題提供した。

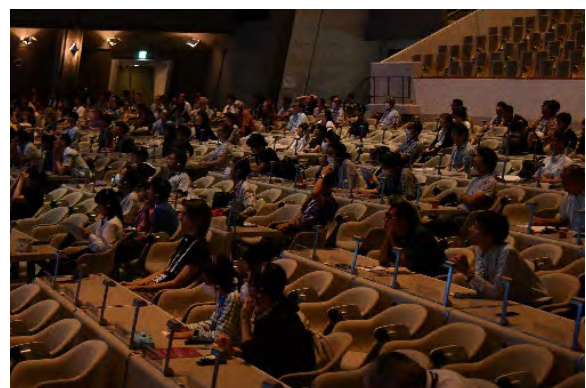
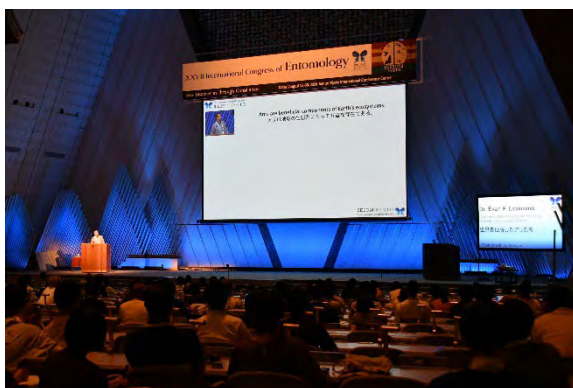


図9. メインホールで開催された市民向け講演会

講演者には市民の目線に立った講演になるようお願いした。原則事前登録制とし、一般市民が国際会議の会場に足を踏み入れる際の垣根を下げる努力をした。日英同時通訳を行い、英語に対する障壁を取り除き、参加しやすくした。その結果、多くの一般市民に参加いただいた。

195 名の方に事前登録をいただいたが、そのうちの 101 名の方に実際に会場に足を運んでいただけた。ホームページ等により本市民向け講演会を知り登録した方が最も多く、次いで友人知人からの情報で登録した方々が多かった。また、参加者の属性は学生が最も多く、会議参加者からも 88 名の出席をいただいた。

2) 昆虫観察会

「世界の研究者と一緒に昆虫を探そう in 宝ヶ池」と銘打って小中学生の募集を始めた。当初は宝ヶ池の公園内の昆虫を観察・採集する予定であったが、2024 年の夏は猛暑との長期予報があり、8 月下旬とはいえ開催日当日も猛暑が予想されたため、室内中心のイベントとして実施することにした。ライカマイクロシステムズ(株)から顕微鏡の借用を受け、リーフマイナー(潜葉性)昆虫、マレーズトラップで採集された昆虫、ゴール(虫こぶ)形成昆虫、土壌節足動物の観察を行った(図 10)。当初、これら 4 つのグループに分かれて順番に回って観察してもらう計画であったが、知的好奇心に火の点いた子どもたちは各自思い思いに行動する結果となった。予めイベントの主催者として立てた計画通りに進行しない場面もあったが、総じて参加した子どもたちはとても喜んでおり、同伴した保護者の皆様からも大変良かったと好評をいただいた。

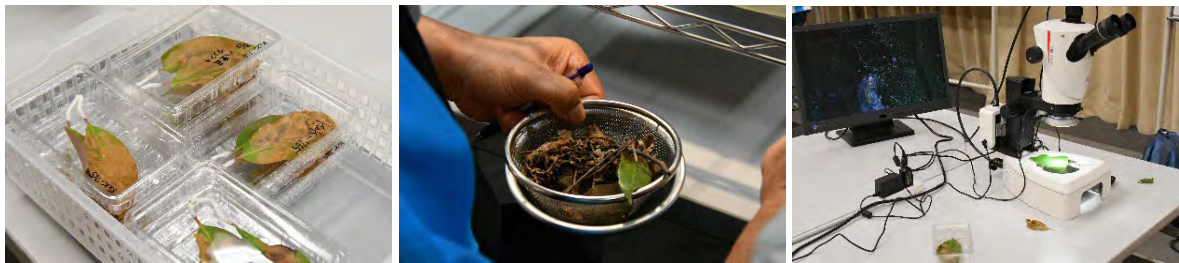


図 10. 昆虫類、土壌節足動物の採集とそれらの顕微鏡による観察

3) 小中高生ポスター発表会

「世界の昆虫学者に成果を発表しよう！ in 京都国際会館」と銘打って、小学生・中学生・高校生による研究活動発表の場を設けた(図 11)。小学生 5 件、中学生 3 件、中学生と高校生からなる団体 1 件、高校生 9 件、高校生からなる団体 1 件の計 19 件の発表があった。取得したデータを丁寧にまとめており、研究内容を英語でうまく発表・紹介できていた。ポスター発表のコアタイム時間前から、小中高生によるポスター発表コーナーには人だかりができており、盛況であった。

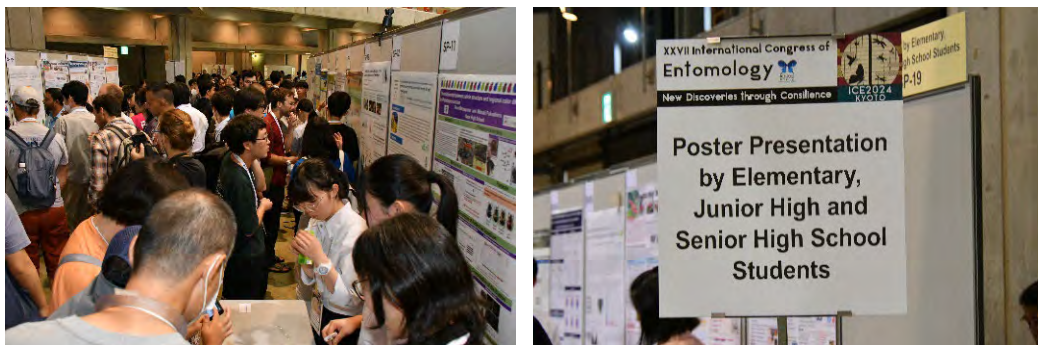


図 11. 大賑わいとなった小中高生のポスターによる研究発表の会場

4) Women in Entomology 講演会

前半の講演では、最初に若手研究者として Charlotte L. R. Payne 氏が「サイエンスにおける女性の時代」というタイトルで、女性がキャリアを築く上での家庭を含めた教育の重要さと、これからの多様性、平等、包括性推進について力強く語られた。Gabriela Caballero 氏は「ギャップを埋める：フランスにおける STEM 分野の女性」という講演で、女性研究者としてのギャップを具体的にどう感じているか、そしてそれをどのように埋める必要があるかについて語られた。市民の皆様にはヨーロッパと日本におけるジェンダー問題の捉え方の差なども感じていただけたのではないかと。最後に、これまで日本の男女共同参画学協会連絡会運営委員長も務められた原田慶恵氏から「日本の未来を担う女性研究者」というタイトルで、日本が抱える課題について総括されるとともに、明るい未来を想像できる応援のメッセージをいただいた。

後半のパネルディスカッションでは、これら3名の女性パネリストとファシリテーター塩月孝博氏が、それぞれの国で感じている課題やそれらを解決するための方策などについて意見交換と議論を行った(図8)。本講演会の登壇者は、司会者・伊藤雅信氏含め男性と女性で構成された。研究の世界では男性、女性が一緒に包括的なアカデミアの発展を考えているという姿勢を、市民の皆様に伝え共有することができた。そして、よりバランスの取れた包括的なアカデミアの発展を促すことを市民とともに考えることができた。今回、市民参加者の内訳をみると、男性参加者数が女性の約半数あった。半数ではあったが、日本の一般男性の方にもこの姿を伝えることができたことはとても有意義であった。

(7) その他：絵画・写真展、昆虫に関連した日本文化の体験コーナー等

絵画・写真コンクールを行った。昆虫好きの子どもたちが感性を表現しやすい方法の一つが絵画、昆虫好きの大人が感性を表現しやすい方法の一つが写真ではないかと考え、年齢層に応じた募集内容にした。絵画は71件の応募があり、審査の結果、最優秀賞2点、優秀賞1点、佳作4点を選出した。写真は397点の応募があり、審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作6点を選出した。受賞作品はメインホール横に展示された(図12)。



図12. メインホール横に展示された絵画・写真コンクールの受賞作品

Welcome Mixer では、和太鼓の演奏と花火の催しを行った(図13)。和太鼓は大変力強い音で迫力があり、参加者が和太鼓の中に引き込まれていく感じが見て取れた。和太鼓の演奏から日本文化・伝統に共感、共鳴してくださった参加者も多いのではないかとと思われる。終盤には花火を打ち上げた。日本文化を一身に浴びながらの ICE2024 KYOTO の幕開けになったと考えられた。



図 13. 和太鼓の演奏と花火の催しで参加者を歓迎した Welcome Mixer

生き物をモチーフにした市民制作の伝統工芸品 12 点（着物、屏風、掛軸など）を常時展示し、日本文化に触れる機会を提供した。また、伝統工芸品の実演（月曜：京漆器、火曜：京友禅、木曜：竹細工）・販売も行い、多くの参加者が工芸品の作製過程に興味深く見入っていた（図 14）。



図 14. 生き物をモチーフにした市民制作の伝統工芸品の展示と伝統工芸品制作の実演



図 15. 日本文化に触れる体験型イベントとして書道・折り紙コーナーを設置

日本文化に直接触れ・自らも参加できるイベントとして、書道・折り紙コーナー（月曜：書道、火曜・水曜：折り紙）を設けた（図 15）。海外からの参加者にとって、半紙に墨で文字を書く体験は初めてであろう。文字の例として、昆虫の名前を筆で描いた見本を準備したが、多くの方が書きたいと希望したのは、自らの名前であった。折り紙では、様々な分類群の昆虫の作品を、その分布域とあわせて展示するとともに、参加者には簡単に作れる作品にトライしてもらった。

ポスター会場と講演会場との間にはガチャポンコーナーを設けた（図 16）。ガチャポンの外側から中身が見えるので、お目当てのモチーフを手に入れるために、何度も回している参加者が沢山おり、日本のサブカルチャーも楽しんでもらえた。



図 16. ポスター会場と講演会場との間に設置された大人気のガチャポンコーナー

参加者には、コンGRESキットとしてプログラムブック冊子体のほか、オリジナルの手拭い、扇子、クリアファイル配布した（図 17）。コンGRESバックはロゴマークをあしらったアースカラーの5色を用意し、参加者に選んでもらった。手拭い、扇子は日本の夏の文化を示すものとして選定した。クリアファイルは絵画・写真コンクールの入賞作品を印刷した。

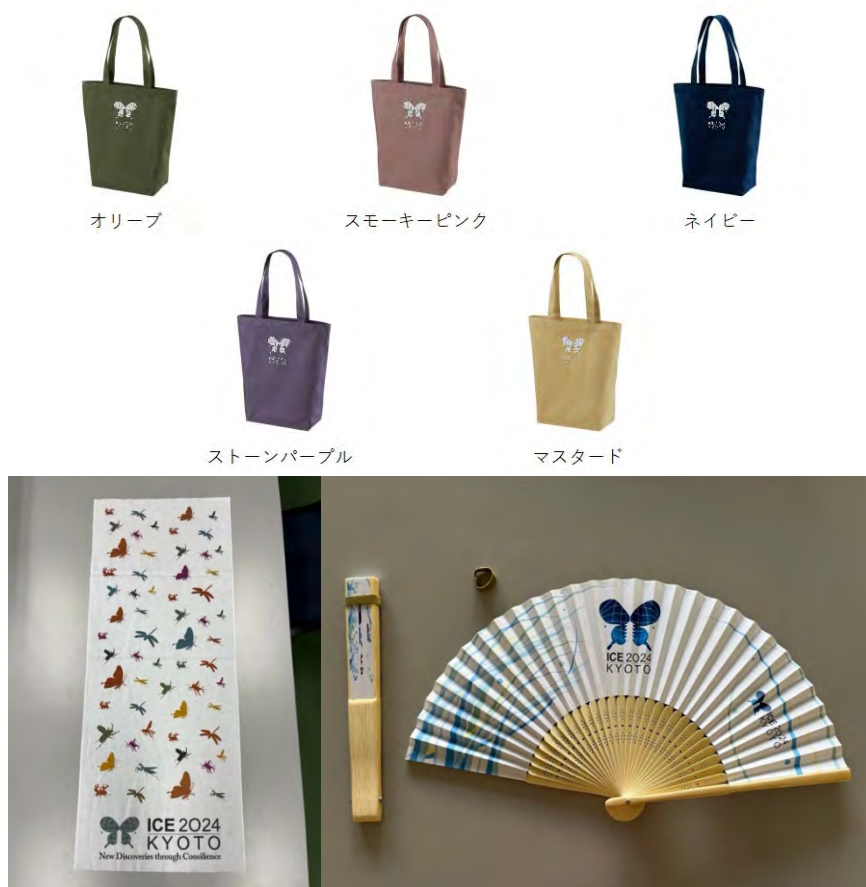


図 17. 好評いただいたコンGRESバッグとコンGRESキットの手拭いと扇子

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

本会議を日本学術会議との共同主催国際会議に選定していただいたことにより、公的行事としての位置付けが強まり、国内外での本会議のプレゼンスが大いに高まった。特に、開会式に秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を賜ることができ、開会式後には、両殿下がポスター展示において国内外の昆虫学研究者と研究交流された。その様子が「第 27 回国際昆虫学会議」という会議名とともに多くの報道機関で取り上げられたことで、昆虫学という研究分野への社会的認知が高まった。また、日本学術会議の公式ホームページやニュースメールを通してアナウンスしていただいたことにより、事前広報が徹底され、学術プログラムおよび市民プログラムへの参加者増加に貢献した。

会議開催費用のうち会場利用料の一部を日本学術会議の経費で支援していただいたことにより、プログラムをより充実したものにすることができた。その結果、日本の昆虫学の高い水準を世界に示すことができ、本会議の成功をもたらした。主催母体である国際昆虫学会議評議員会（CICE）の Leal 会長らからも、高く評価していただいた。開会式に御登壇、御挨拶をいただいた日比谷副会長、事前の会場の下見やリハーサルにおいて多くの助言をしてくださった日本学術会議事務局の関係者各位に深く感謝申し上げます。